

ドイツ語の知覚動詞について

—階層性と多義性をめぐって—

最上英明

はじめに

動詞の中でも、「見る」や「聞く」に代表される知覚動詞（ドイツ語の文献では、Verba sentiendi とラテン語で表記されることが多い）と呼ばれる一群の動詞は、多くの言語において、統語的にも意味的にも興味深い特性を示す。そのため、これまでの言語研究においても、様々に議論されてきている。この小論の目的は、従来の知覚動詞に関する議論を階層性と多義性の観点から整理しなおし、いくつかの他言語との比較をも通して、ドイツ語の知覚動詞の特性に関わる重要な問題点を明確にし、考察を加えることである。

I 知覚動詞の階層性

ドイツ語の知覚動詞というと、sehen (見る／見える), hören (聞く／聞こえる), fühlen (感じる) などが代表的なものである。これらの動詞は、ラテン語や英語などと同様に、対格（4格）目的語と原形不定詞とを従えることができる。この構文は「不定詞付き対格」と呼ばれ、次のような文を形成する（ドイツ語では Akkusativ mit Infinitiv だが、ラテン語の accusativus cum infinitivo を略した AcI 構文と呼ばれるのが一般的で、ここでも、以下、AcI 構文と記す）。

- (1) a. Sie sah die Kinder in ihrem Garten spielen.
 b. Hans hörte die Diva eine Arie singen.
 c. Sie fühlte die Nässe auf ihre Hand durchsickern.
 d. Sie spürte ihr Herz heftig pochen. (Bausewein 1990: 209)

それぞれ「彼女は子供たちが庭で遊んでいるのが見える」「ハンスはその歌姫がアリアを歌うのが聞こえる」「彼女は手が濡れる感じがした」「彼女は心臓が激しく鼓動するのを感じた」といった内容の文で、それぞれの知覚動詞が、目的語として対格目的語と原形不定詞の両方をとる構文の例である。

この構文を形成する動詞は、他に lassen, heißen, machen などがあるが、知覚動詞では、現代ドイツ語では、これら4つの動詞に限られる。

(2) a. Helga sieht ihren Sohn rauchen.

b. sehen, hören, fühlen, spüren (Eisenberg 1989: 385)

(2 a)の「ヘルガは息子が煙草を吸うのを見る」という文で、「見る」と代替が可能なのは、「聞く」と「感じる」だけである。つまり視覚、聴覚、及び広義の知覚全般に関わる動詞だけが AcI 構文を形成できることになる。それに対し、いわゆる五感と呼ばれる感覚のうち、嗅覚と味覚の動詞である riechen (嗅ぐ) と schmecken (味わう) は、こうした AcI 構文を作れない。味覚と嗅覚は、感覚の中でも特殊化された領域の感覚であることも要因の一つであろう。もっとも、riechen (嗅ぐ) に関しては、Vater (1976) で、完全に容認不可能とはいえない次のような例も挙げられている。

(3) ?Ich roch Gas ausströmen.

(Vater 1976: 215)

これは「ガスが漏れるのが匂った」という意味で、許容可能性の判断に揺れがある例である。目的語の内容が匂いに関するものであるということで、多少は許容性が高まっているものと考えられる。いずれにせよ、ドイツ語での「匂う」は、こうした構文を形成する動詞と見なされないのが一般的である(ただし、英語の smell, フランス語の sentir は、AcI 構文をとれる⁽¹⁾)。

(1) Clément (1971: 249), Falkenberg (1989: 41)

Hyvärinen (1984) は, Mannheimer Korpus のデータベースから, AcI 構文を作る 4 つの知覚動詞の例を 337 例集め, それらを動詞別に集計した。それによると, sehen が 209 例, hören が 115 例あったのに対し, fühlen が 9 例, spüren が 4 例だった⁽²⁾という。このことから, AcI 構文を形成する知覚動詞でも, 「見る (見える)」が圧倒的に多く用いられ, 「聞く (聞こえる)」がそれに準じ, 「感じる」にいたっては, 使用頻度は極めて低いことがわかる。

Falkenberg (1989) は, これらの知覚動詞を含め, いくつかの周辺的な知覚に関する動詞を加えて, その目的語のとり方に関して, 次のような仮説を提案している (なおこれは他動詞の純粋に知覚的な用法に限定したものである)。

(4)		Akk obj	daß, wie	AcI
(I)	sehen, hören, fühlen, spüren	○	○	○
(II)	riechen, beobachten, bemerken, empfinden	○	○	×
(III)	schmecken, betrachten, erblicken	○	×	×

(Falkenberg 1989 : 41)

いずれも他動詞として使われることを想定しているので, 対格 (Akkusativ) の目的語をとるのは当然である。知覚動詞の代表的な 4 つの動詞は, (I) のグループとして, AcI 構文も daß や wie で導入される従属節もとれ, 極めて幅広い統語的特性を示す。(II) の riechen (嗅ぐ) を含むグループでは, AcI 構文はとれなくなる。(III) の schmecken (味わう) を含むグループでは, さらに統語上の制限が加わり, daß や wie で導入される従属節もとれない。同じ知覚動詞でも, 統語上の面からこのような 3 段階の階層性があることが指摘されている。

以上, ドイツ語の知覚動詞に関わる階層性を見てきたが, 知覚動詞の種類に

(2) Hyvärinen (1984 : 303)

ついては、言語により実に多様であることを Viberg (1983) が示している。例えば、イタリア語では、sentire という動詞は、「聞く」という意味がもともと優勢であるが、その他に「さわる」「味わう」「嗅ぐ」という他の感覚の意味も併せ持つ。またスウェーデン語では、「見る」が se、「聞く」が höra であるが、英語の feel, taste, smell に相当する動詞は、すべて känna を用いるという。

- (5) a. Feel : känna
 b. Taste : känna smaken av (feel the taste of)
 c. Smell : känna lukten av (feel the smell of) (Viberg 1983: 144)

ただし実際の使用では、(5 b)や(5 c)のように、「味を感じる」「匂いを感じる」というように、それぞれの感覚を示す名詞と一緒に使われる。味覚と嗅覚の表現が感覚の中でも特殊化・細分化されたものであることが、こうした事例からも了解できる。

II 知覚動詞の多義性

これまで知覚動詞の本来の知覚的な用法のみに限定して話を進めてきたが、同じ知覚動詞でも、知覚的な用法以外の意味を持ち、その意味の違いが統語上の重要な違いを生じることがある。この章で、こうした問題について検討する。知覚動詞が具体的な知覚の意味の他に、知的な認識の意味でも用いられることはよく知られている。中島(1980)では、同じ英語の see や hear という動詞でも、これらを区別して呼んでいる。

- (6) a. I saw the boy cross the bridge.
 b. I heard the door slam just at midnight. (中島 1980: 37)
- (7) a. I saw that the house was no longer there.
 b. I hear that he made a gross mistake. (中島 1980: 44)

(6)の AcI 構文では、「少年が橋を横切るのが見えた」「ドアが夜中にパタンと閉まるのが聞こえた」と、具体的に「見る」「聞く」の意味で用いられている。この場合は感覚動詞 (sensory verb) と呼ばれる。(7)の that 節をとる場合では、「家がもうここにないことがわかる」「彼が大きいミスをしたと聞いて知る」と、「見てわかる」「聞いて知っている」という認識的な意味となる。この場合は知覚動詞 (perceptive verb) と呼ばれる。この小論では、特に用法の違いにより呼称を区別せず、両者とも知覚動詞と呼んで便宜上扱うが、こうした違いはドイツ語でも同様にみられる。

特に重要なのは、AcI 構文をとれる知覚動詞でも、語義の違いにより、構文をとれる場合ととれない場合とがあることである。

(8) a. Man sieht ihn reden.

b. Man sieht, daß er redet.

(9) a. *Aus dieser Bemerkung sehe ich ihn uns verlassen.

b. Aus dieser Bemerkung sehe ich, daß er uns verläßt.

(Suchsland 1984 : 69)

Suchsland (1984) によると、(8)は視覚的知覚 (optisch wahrnehmen) の場合の例で、「彼が話をするのが見える」という意味で、AcI 構文も daß で始まる従属節もとることができる。一方、(9)は思考的理解 (gedanklich begreifen) の場合の例で、「彼が我々のもとを去ったのだとこのメモから思う」という意味で、この場合、AcI 構文を使うことはできない。つまり、AcI 構文をとれるのは、直接的な知覚の場合に限られるということである。

この問題は、知覚動詞の AcI 構文の先駆的な研究である Clément (1971) 以来、注目されてきたが、純粋な感覚知覚 (echte Sinneswahrnehmung) の場合に限られる構文であるとされ、次のような知的認識では使えない。

(10) a. *Ich sehe das Argument zutreffen.

- b. Ich sehe, daß das Argument zutrifft. (Clément 1971: 247)
 (11) *Ich sehe zwei und zwei vier sein. (Bausewein 1990: 212)

(10)のような「その議論は妥当だと思う」という知的認識の場合は、daß節でのみ表現が可能で、AcI構文は不可である。(11)も「2 + 2 は4 だと思う」という知的理解の意味の文であり、同様にAcI構文は不可である。

AcI構文における意味的な制約として他に重要なものとして、原形不定詞の動詞は何らかの活動(Tätigkeit)、出来事(Ereignis/Vorgang)を表現するもので、状態(Zustand)を表現できないということが指摘される。

- (12) a. Wir sehen, daß er einen Hut besitzt.
 b. *Wir sehen ihn einen Hut besitzen. (Primus 1986: 144)
 (13) a. Ich sehe Peter fiebern.
 b. *Ich sehe dich Fieber haben. (Vliegen 1988: 151)

(12)の従属文は「彼が帽子を持っている」という状態を述べており、AcI構文にはできない。(13)の文はどちらも「熱がある」という意味で似通っているが、(13 a)のfiebernは<+出来事>という素性を持ち、(13 b)のFieber habenは<-出来事>という素性を持つという。このことからAcI構文を形成できるかできないかの違いが生じるとClément (1971)は説明する。Vliegen (1988)では、fiebernの方は寒くて震えているような状況を直接観察して述べる場合に使い、Fieber habenは体温を測定するなどして間接的に状況を述べる場合であるとの説明が見られる⁽³⁾。

具体的な知覚の場合に限りAcI構文が可能であるという点では、hören(聞く)という知覚動詞でも同様である。(14 a)のような構文が可能なのは、(14 b)での「レコードプレーヤーが落ちるのが聞こえた」という直接落ちる音を自分

(3) Clément (1971: 256), Vliegen (1988: 151)

の耳で知覚する場合に限られる。(14 c)のように落ちたという話を誰かから間接的に聞く場合(伝聞なので接続法が使える)は、AcI 構文にはできない。

(14 a. Ich hörte den Plattenspieler hinunterfallen.

b. Ich hörte (= ich nahm akustisch wahr), daß der Plattenspieler hinuntergefallen war/*sei.

c. Ich hörte (= ich hörte jemanden sagen), daß der Plattenspieler hinuntergefallen sei. (Bausewein 1990: 121)

次に否定のスコープの観点からも、AcI 構文は独自の特性を示す。(15 a)のこの構文での否定辞は、「彼女が来た」という知覚される出来事にかかるのではなく、「私は見た」という知覚動詞の方にかかるという。つまり(15 a)の文は、(15 b)のような「私は彼女が来たのを見なかった」という意味であり、(15 c)のように「彼女が来なかった」ことを「見た」とはならない。つまり、この構文での否定辞は常に広いスコープをとると考えられる。このことは日本語の表現から考えてみても、「?彼女が来なかったことを見る」という表現はいささか不自然で、「彼女が来ない」という文を従属節にする場合には、「彼女が来なかったと思う」と直接知覚でなく認識的に表現する方がやはり普通であろう。

(15 a. Ich habe sie nicht kommen sehen.

b. Ich habe nicht gesehen, daß sie gekommen ist.

c. Ich habe gesehen, daß sie nicht gekommen ist.

(Bausewein 1990: 214f)

(16 a. Wir sehen, daß er keinen Kuchen bäckt.

b. *Wir sehen ihn keinen Kuchen backen. (Primus 1986: 144)

このことから逆に、(16 a)のような「彼がケーキを焼かない」という従属節の場合、主節は「見る」ではなく「思う」の意味となり、AcI 構文での表現は不可能

である。⁽⁴⁾

こうしてみると、同じ知覚動詞を使った文でも、AcI 構文と daß 従属節とでは意味が同一ではないことに注目されることになる。この点に関して、言語哲学的な観点から次のような指摘がみられる。

(17) a. Die Mutter hörte ihr Kind schreien.

b. Die Mutter hörte, daß ihr Kind schrie.

(18) a. Die Mutter hörte ihr Kind schreien, aber sie wußte nicht, daß es sich um ihr Kind handelte.

b. !Die Mutter hörte, daß ihr Kind schrie, aber sie wußte nicht, daß es sich um ihr Kind handelte. (Vliegen 1988: 154)

(17 a)も(17 b)も「母親は自分の子供が叫ぶのを聞いた」という意味だが、(17 a)の場合は、聞こえた声を母親が自分の子供の声だと知らなくても構わないの⁽⁵⁾に対し、(17 b)の場合は、母親は叫び声が自分の子供の声であることを知っていることが事実として前提となるという。従って、(17 a)は(18 a)のように「自分の子供の声とは知らなかった」という文を付加できるが、(17 b)は(18 b)のような文にすると不自然になると考えられる。こうしたことから、知覚動詞では、AcI 構文は単に知覚行為を述べるのに対し、daß の従属節をとると、知覚される事柄の事実性が強まることがわかる。

さて、これまで「見る」と「聞く」の事例を中心に検討してきた中で、知覚動詞の意味が具体的な知覚の意味と知的認識の意味との多義的な構造になっていることをみてきた。Viberg (1983)によると、その他の感覚の知覚動詞も含め、数多くの言語において、下記のような知覚動詞における知覚から認識への意味

(4) AcI 構文の制約としては、ここで挙げた以外に、原形不定詞として助動詞や受動形をとれないことなどがある。

(5) こうした現象は言語哲学の立場から epistemische Implikaturaufhebung (認識上の含意の棄却)と呼ばれている。

の拡張がみられるという。

(19) Perception	Cognition	
See	know, understand	'I see'
Hear	know, understand	
Feel	experience, think	
Taste	experience	'taste freedom'
Smell	suspect (detect a secret)	'smell treason'

(Viberg 1983: 158)

Viberg (1983) 自身, (19)の表はまだまだ不十分なものと述べているが, 今後の考察への指針を与えるものであるので, いくつか検討しておくことにする。「見る」が「わかる」という意味も併せ持つことについては, すでに見た通りで, (19)の 'I see (= understand)' の例がもっとも端的なものであろう。「聞く」の場合も, 「聞いて情報を得る」という意味を併せ持つことはすでに見た通りである。ただし「知る」ことに関しては, 聴覚よりも視覚の方が極めて優位に立っていることは, いくつかの事例から明らかである。例えば, ポリネシアやオーストラリアのある言語では, 同じ語彙で「見る」と「知る」の両方の意味を持つものがあるという。「知る」という意味を持つドイツ語の *wissen* やスウェーデン語の *veta* という動詞が印欧語の「見る」の過去分詞が語源であるということも興味深い事実である。⁽⁶⁾

(20) idg. *ueid-(sehen/erblicken)

Perf. *uoida (ich habe gesehen/erblickt = ich weiß)

(Wahrig Deutsches Wörterbuch 1986)

(6) Viberg (1983: 157)

「見る」ことが「知る／わかる」ことへの重要な要因とする、理解における視覚の重要性を瀬戸（1995）はメタファーの観点から詳細に論じている。その中で、「光があたる」ことにより物事が明確になるというメタファーにも触れられている。Wandruszka（1990）によると、光のメタファーとして考える伝統は、ラテン語によりヨーロッパの文化に深く根ざしているものである。ラテン語の *illuminare* という動詞は、「光を照らす」の他に「解明する」という比喩的な意味も持ち、ここから *erleuchten* などの形でドイツ語へも移入したと考えられる。人間の魂に「神の啓示 (*göttliche Erleuchtung*)」が訪れるというような光のメタファーを用いた表現も、ドイツの神秘主義者たちに使われたという。こうした単語は、日常にも及び、次の *einleuchten* というような動詞は普通の小説でもよく出てくる。⁽⁷⁾

(21) *Uns heutigen Menschen leuchtet das sofort ein.*

今日の我々には、それはすぐわかる。 (Süskind: „Das Parfum“)

さて「見る」と「わかる」こととの関連性の強いことを指摘してきたが、ラテン系の言語では、味覚の動詞と「知る」こととの間に関連性があり、(19)の表への反例となることを Viberg (1983) 自身も認めている。⁽⁸⁾

(22) ラテン語 *sapere* (味わう／知る)
 スペイン語 *saber* (味わう／知る)
 フランス語 *savoir* (知る) *savourer* (味わう)

ラテン語とスペイン語では、「味わう」ことと「知る」ことが同じ語彙で示されるが、フランス語ではそれぞれに分化している様子が見え始める。多義性の構造が、やはり言語により多様なものであることの一端が見て取れる。

(7) Wandruszka (1990: 54)

(8) Viberg (1983: 158)

次に味覚に関しては、英語の taste が(19)の表の例の taste freedom (自由を経験する)のように、「経験する」の意味を持つことも可能である。ただしドイツ語で同様の意味を持つ schmecken は、具体的な味覚の場合にしか用いられず、英語のような用法は存在しない。従って(19)のような一般化はドイツ語には妥当しない。なお味覚の動詞に関しては、次のような指摘も見られる。

(23) いつの時代でも多くの文化には二重の意味が込められていた。味覚という語は中英語で触ってみる、検査する、味を見るという意味をもつ tasten に由来するが、さらにラテン語で鋭く触ることを意味した taxare にまで遡れる。したがって味覚とはつねに試行であり、試験であったのだ。

(アッカーマン 1996 : 165)

このラテン語の taxare に由来する語彙をいくつか並べると次のようになる。

- | | | |
|------|---------|-----------------------|
| (24) | フランス語 | tâter (さわる／探る) |
| | 英 語 | taste (味わう／経験する／試食する) |
| | ド イ ツ 語 | tasten (さわる／探る) |

ドイツ語とフランス語とで、語義がほぼ同じであることがわかる。この系列の語で「味わう」という意味を持つのは英語だけである。あとから味覚に関する意味が加わったのではないかとも考えられる。

ここで触覚について考えてみると、(24)のように「さわる」から「探る」への転移については、フランス語とドイツ語の動詞で見てとれる。英語で「さわる」の意味をもつ touch の他言語との関連は次の通りである。

- | | | |
|------|---------|----------------------|
| (25) | フランス語 | toucher (さわる／感動させる) |
| | 英 語 | touch (さわる／感動させる) |
| | ド イ ツ 語 | berühren (さわる／感動させる) |

フランス語も英語も俗ラテン語の *toccare* (打つ) という擬声語に由来するとの説明が多く、辞書でなされているが、これと同じ語源の語彙がドイツ語には存在せず、*berühren* という動詞で同じような意味を表現する。「さわる」のが単なる物体ばかりでなく、日本語で「琴線に触れる」という言い方があるように、心にも触れるという点まで語義が拡大されるのも興味深い。

最後の嗅覚については、「匂いを嗅ぐ」から「何かを嗅ぎつける」への一般化は、極めて妥当である。日本語でも「～の匂いがする」という場合、具体的な対象の匂いを表現する場合と、「犯罪の匂いがする」のように比喩的に言う場合とあり、多くの言語でこうした傾向があることが予測される。ドイツ語でも *Das riecht nach Verrat.* (裏切りの匂いがする) という言い方ができる。(19)の表での *smell treason* (反逆を嗅ぎつける) という英語の例もある。英語では *smell a rat* という表現が「ねずみの匂いを嗅ぎつける」ことから、熟語として「嗅ぎつける／感づく」という意味を持つまでになっている。ドイツ語でもまた他動詞として「気づく (*merken*)」「感じる (*spüren*)」といった意味で用いられる。

(26) a. *Er roch (= merkte) sofort, daß hier etwas nicht stimmte.*

b. *Er muß die Gefahr gerochen (= gespürt) haben.*

(Duden Deutsches Universalwörterbuch 1983)

(26 a)が「彼は違っていることにすぐ気づいた」、(26 b)が「彼は危険を感じたにちがいない」の意味となり、*riechen* が匂いの知覚から認識の意味へ変わっている。

なお、匂いに関する語彙は、英語やドイツ語では「煙を出す (喫煙する)」や「くすぶる」のような語彙と関連があることも指摘されている。

(27) 英	語	<i>smell</i>	<i>smoke</i> (煙を出す)	<i>smolder</i> (くすぶる)
	ドイツ語	<i>riechen</i>	<i>rauchen</i> (煙を出す)	

riechen がもともと rauchen の意味をもっていたことを示す例として、中高ドイツ語の「パルチヴァール」に次のような例がある。

(28) min küche riuchet selten (Parz. 485, 7)

私の台所から煙は出ない⁽⁹⁾ (Paul Deutsches Wörterbuch 1967)

riechen の「煙が出る」というもとの意味が、時代とともに rauchen の方へと移っていき、嗅覚の動詞としての riechen が生まれたことになる。

以上、いくつかの知覚動詞について、統語上及び意味上からいくつかの問題を検討してきたが、さらに多くの資料を通して、知覚動詞の階層性や多義性の構造を精密化していくことが今後の課題である。

参 考 文 献

- アッカーマン, D. 岩崎徹/原田大介訳 1996. 『感覚の博物誌』。東京 (河出書房新社)。
 Bausewein, K. 1990. Akkusativobjekt, Akkusativobjektsätze und Objektsprädikate im Deutschen. Tübingen
 Clément, D. 1971. Satzeinbettung nach Verben der Sinneswahrnehmung im Deutschen. In: Wunderlich D. (hg.) Probleme und Fortschritte der Transformationsgrammatik. München. 245-265.
 Eisenberg, P. 1989. Grundriß der deutschen Grammatik Stuttgart
 Falkenberg, G. 1989. Einige Bemerkungen zu perzeptiven Verben. In: Falkenberg, G (hg.) Wissen, Wahrnehmen, Glauben. Epistemische Ausdrücke und propositionale Einstellung. Tübingen. 27-46.
 Hyvärinen, I. 1984. Zur Satzgliedanalyse der AcI-Konstruktionen bei den deutschen Verben der Sinneswahrnehmung. Deutsche Sprache 12. 303-325.
 中島文雄. 1980. 『英語の構造 上』。東京 (岩波新書)。
 Primus, B. 1987. Grammatische Hierarchien. München.
 瀬戸賢一. 1995. 『メタファー思考—意味と認識のしくみ』。東京 (講談社現代新書)。
 Suchsland, P. 1984. Über einige Probleme der Behandlung des Verhältnisses von

(9) なお、加倉井/伊東/馬場/小栗訳 (郁文堂) によると、「台所で煮たきすることなく、草根を生食しているの意」とのことである。

- Semantik und Syntax in einer deutschen Grammatik. Deutsch als Fremdsprache 21. 65-128.
- Vater, H. 1976. Wie-Sätze In: Braunmüller, K und W. Kürschner (hg.) Grammatik. Tübingen. 209-222.
- Viberg, Å. 1983. The Verbs of Perception: A Typological Study. Linguistics 21. 123-62.
- Vliegen, M. 1988. Verben der auditiven Wahrnehmung im Deutschen. Tübingen.
- Wandruszka, M. 1990. Die europäische Sprachengemeinschaft. Tübingen.